

上御開発之新田畠より作出候米穀之増加御江戸大坂を集り候故近年之下直と奉寮上候御事由（享保16年10月大坂の米仲買かる提出された旨上書。元禄・享保期の米価変動につれて
5. 山崎隆三より引用）

ここに示されていふやうに、享保7年以降豊作続きの上に近年の新田開発により各地の産米が増大した。

ここで享保の米価の低落による一つの現象として、身分制の強化についてみてみよう。
10 18世紀になると、幕藩体制が動搖を示しはじめ、身分制が強化されたことはよく知られる。この原因については現在明確な論理はない。例えば、原田伴彦は其著、「部落の歴史と解放運動」の中で身分制の強化を凶作に
15 よるものとしている。しかし、本稿の理論からすれば、身分制の強化は凶作ではなく米穀の過剰生産から来るものだけれどそりまつ。このことと互証するものとして広島藩の場合をあげておく。享保十一年の『家中不勝手に

つき知行免戻し、候約文申渡す覚のうちに次の
のような一文がある。

『御勝手向え儀、近年御候約被仰付候處、一
兩年に至り候而者未も下直に相成、第一御家
中之者彼及難儀候段難被捨置、御戻、未被仰
付、弥増之御差闊於江戸公儀御勤え儀者格別、
御一家様方え御贈答等一切御断被仰、御國方
に而者猶以細敷御候約可被遊与恩召……』

(広島県史キリ)

この享保十一年には広島藩において身分制
の強化策として種々の候約令が出されるので
ある。例えば、寺社方候約令、郡方候約令、
江戸方候約令、町方候約令、かわた方候約令
である。

このようにして、身分制の強化は行われた
が、やがて、これも維持できなくなる次のよ
うな現象が生じてくる。すなわち、小作・地主
関係の成立、穀物生産から綿生産への移行、
農村から都市への人口移動（後に「人返し令
」も出される）である。

ス、フランスの場合

1630年代から1730年代に至る100年間は長期的「不況」の時期とされである。この原因は、穀物価格の長期的停滞を以て低落の中に求められるのが常である。以下に「岩波講座世界歴史14 フランス絶対王政期の農村社会」で邊塚忠躬氏の引用したグラフを再掲する。この時代の中で誕生したクネーが農業を生産的部門とし、商業を非生産的部門と説いた（重農主義）ように、この時代のフランスは、また農業主体の国家であった。この中で、穀物価格の低落は、市民の土地の増加、農村の階級分化、農民の移動を引き起こしていくのである。

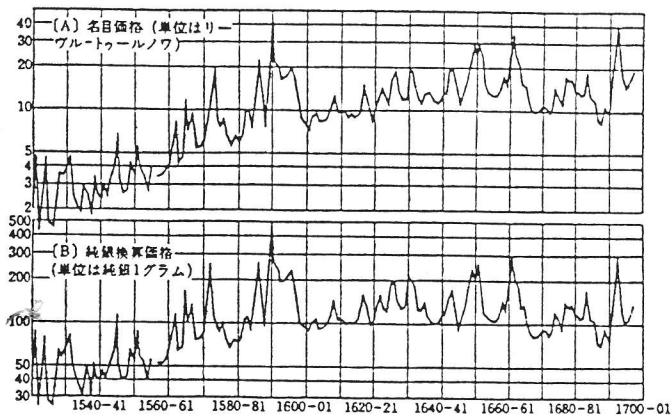


図1 パリにおける小麦価格 (1スティエ・ドゥ・パリ=156リットル当り)

[資料] M. Boulant et J. Meuvret, *Prix des cértales extraits de la mercuriale de Paris, tome II*, Paris, La VI^e Section de L'École Pratique des Hautes Études, S. E. V. P. E. N., 1962, pp. 152-153.

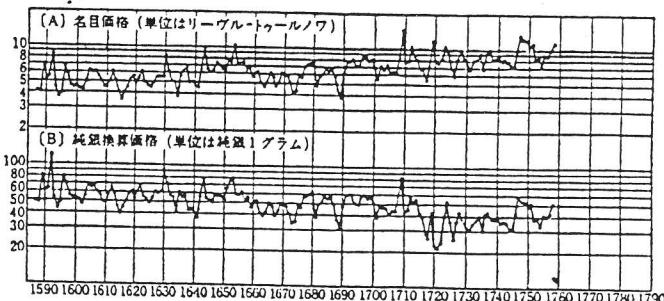


図2 ベジエ(ラングドック)における小麦価格 (1スティエード・ド・ベジエ=66リットル当り)

【資料】 E. Le Roy Ladurie, *Les paysans de Languedoc*, tome II, Paris, La VI^e Section de L'École Pratique des Hautes Études, S. E. V. P. E. N., 1966, pp. 946-947.

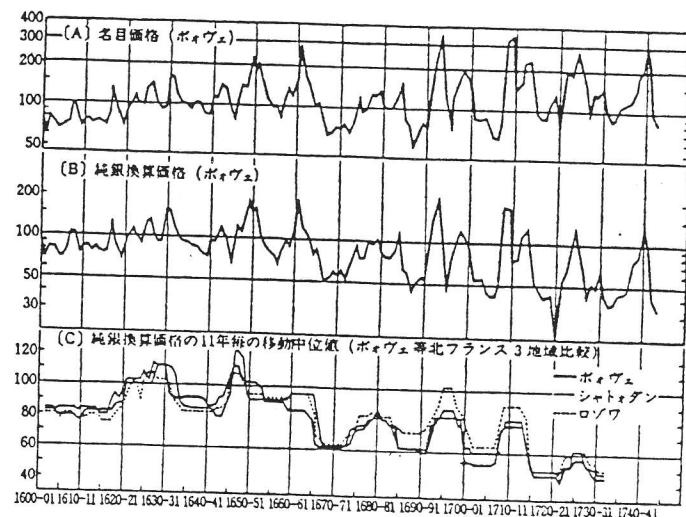


図3 ボーヴェ等における小麦価格 (1601-56年を100とした指数)

【資料】 P. Goubert, *Beauvais et le Beauvaisis de 1600 à 1730*, tome II, Paris, La VI^e Section de L'École Pratique des Hautes Études, S. E. V. P. E. N., 1960, Atlas, pp. 78-79, 92-93.

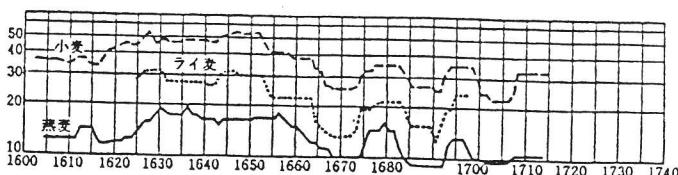


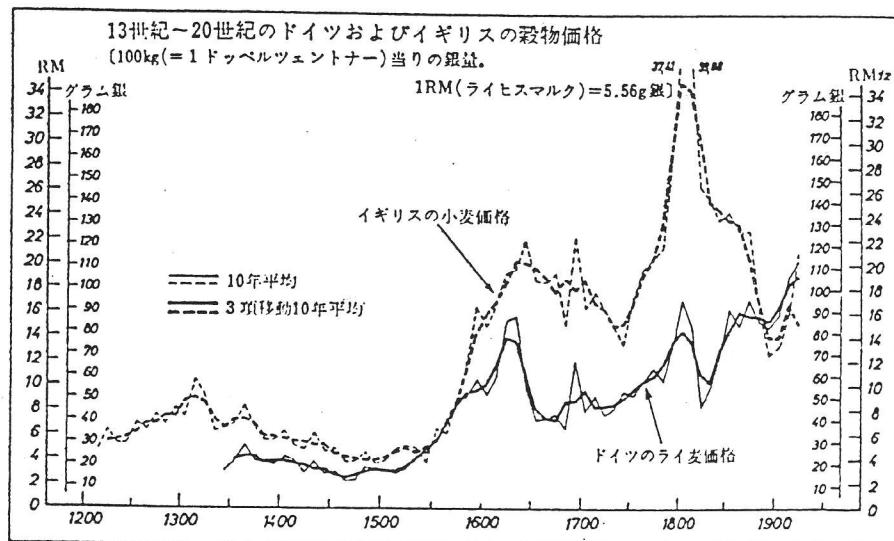
図4 アミアンにおける穀物価格 (1スティエードミアン=34.7リットル当りソル、貨幣の貯金庫占有量を算入した修正値、11年毎の移動中位数)

【資料】 P. Deyon, *Amiens, capitale provinciale*, Paris, Mouton, 1967, pp. 504-505.

3. イギリス・ドイツの場合

まず、『ワーアーベル　ドイツ農業発達の三段階』よりイギリス・ドイツの麦価の価格変動を示すグラフを掲げる。

5



この麦価の価格の変動を整理すると次のよ

うにまとまる。

	1350年～1550年	1550年～1630年	1630年～1750年
イギリス	下落	上昇	下落
ドイツ	下落	上昇	上昇

(20×20)

イギリスにおいて 1550 年から 1630 年の間、
 物価の価格は上昇してゐる。しかし、イギリスは、この間にエリザベス一世の絶対主義の時代を経て、トマス＝モアが、「羊が人間を食う時代」と呼んだ第一次圈の込みが行なわれてゐる。そして、この時代は価格革命と呼ばれる、メキシコやペルーの銀が、ヨーロッパに大量に流入し、物価が急騰した時代である。一般には、十六世紀は新大陸からの貴金属の流入や商業・貿易の拡大により一般的「好況」にあつたとされる。しかし、本稿ではエリザベス一世の時代は、穀物の過剰生産の時代であり、価格は上昇してゐるが、穀物の相対価格は低落していたと考えられる。これを実証してみよう。

農業保護法 (An Acte for the Maintenance of Husbandrie & Tillage) (1597年～1598年) より 『そこで（エリザベス）女王の治世第 35 年に、一つには当時、本王国において穀物が誠に豊富かつ廉価なる理由をもつて、一つには本件に関し

て制定された法の不完全さと不明確さのゆえに、それらは廃止の止むなきにいたった。以降、耕地の牧場への転換により、それ以前のいかなる時よりもはるかに人口減少が生じるにいたった。……凸（原典イギリス経済史より）

また、『圓の込みに対する各層の苦情』の中では、マナイト：余せなら、われわれがこの物価騰貴を経験するようになつたのは穀物不足によるものではありません。それに神様のおかけで穀物の値段は安く、しかもそうした時代が二三十年間もつづいているのですからね。また圓の込みが家畜の値段の上、大原因であるはずもありません。というのは、圓の込みは主に牛馬もほんどの家畜を食料とするものだからです。とはいって本当のことといえば、あるゆるもののが値段があと3倍ほど高くなっているのは事実です。………凸

(A Discourse of the Common Weal of this Realm of England, edited from MSS. by the late Elizabeth Lamond,

著者 泉 宏明

住所 〒739-0145 広島県東広島市八本松町宗吉 92-5

HomePage

http://www7a.biglobe.ne.jp/~popuri_art/izumi/

copyright©2012 泉宏明 all rights reserved.